

## 推薦のことば

最近の超音波検査の進歩はめざましい。装置面では画像の解像度を大幅に向上させたティッシュハーモニック技術とBモード画像に血流を重ねて可視化させた2次元ドプラ技術の開発・実用化などが特筆される。一方、臨床面では、これらの新技術の開発や導入によって装置の機能と利便性は著しく向上し、多くのユーザーに新しい領域を開拓する勇気と英知を与え、従来、超音波世界ではタブーとされていた分野にまで革命的進歩を齎した。その典型は消化管と整形外科領域であろう。本来、超音波はガス（気体）や骨によって強く反射され、吸収される性質があり、消化管、胸腔、骨格などは対象外とされてきたが、超音波愛好者は労苦を厭わずこのタブーを乗り越え新分野の開拓に挑戦されてきた。もう四半世紀以上も前に遡るが電子スキャンが実用化されて間もない頃、X線検査では判定困難な胸水や外傷時に刺入した体内の木片の探査、癌の先導による腸重積、進行した消化管の癌などの検出に極めて有用であることが学会やセミナーなどでよく報告されていたし筆者も経験し認識していた。しかし、その効果は所謂「怪我の功名」のような偶然性や副産物的なものとして扱われ、超音波検査の主流としては認められていなかった。最近の報告を見聞すると装置の進歩、特に解像度の向上と共に超音波担当者の走査技術や画像の見方に大きな変化が見られ、対象領域が著しく拡大した。また、所見の追求は「塊（マス）から線（層）」に伸展し、軟部組織の微細な変化から病変を読み取る域に至っている。その昔を知る者にとっては驚異の進歩といわざるを得ない。この驚くべき進歩を支えた原動力は装置の進歩は勿論であるが、超音波検査の魅力に取りつかれた者たちの長年にわたる研鑽の集積であろう。

この度『肋骨骨折エコー』を出版された杉山高氏は、その一人で、遠く電子スキャン装置の実用化以前のいわゆる「黎明期」より、超音波検査を単なる「生体検査」ではなく「画像診断」と位置づけ、広い領域にわたり臨床超音波の進歩に寄り添って尽力されてきた人である。氏の信条は「実学」を尊び、理論より技術を、知識より実蹟を重んじるもので、その著書は読みやすく解りやすいのが特徴である。装置の傍らに置いて、プローブ走査の合い間にページをめくれば、必ず役立つものと信じている。

(2014,12,24 記)

元 日本超音波医学会理事長 竹原 靖明